

編集委員長就任にあたって

『立命館人間科学研究』は、立命館大学人間科学研究所発行の紀要として2001年3月に創刊されました。2016年度に発行予定の第34号（次号）では、継続前誌の『立命館教育科学研究』から通算して50号になります。第33号より編集委員長を拝命した者として、人間科学研究所と本誌の15年間で簡単に振り返り、抱負に代えさせていただきます。

人間科学研究所は、前身である教育科学研究所（1990年設立）を改組して2000年4月に衣笠キャンパスに設立されました。時を同じくして、本研究所が申請した文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業学術フロンティア推進事業「対人援助のための人間環境デザインに関する総合研究」（2000～2004年度）が採択され、この資金を活用して衣笠山を背にバリアフリーの研究施設「創思館」が2001年に竣工しました。人間科学研究所はこの創思館を拠点として、その後も文部科学省等の学外研究資金を獲得しながら、「対人援助」をキーワードに専門分野を超えた共同研究を推進してきました。実験・調査あるいは理論などの基礎研究から、社会への実装を目的にした応用研究に至るまで、学内外の研究者のみならず、地域や実践家さらには課題を抱えた当事者との連携をも視野にいれながら、旺盛な研究活動をすすめています。

人間科学研究所の機関誌である『立命館人間科学研究』は、これらの研究成果を発表する場としての役割を果たしています。それに加えて研究所のプロジェクト関係者以外の本学所属の教員、研究員、大学院生等にも投稿の機会を提供しています。2007年には若手研究者養成を主眼とする文部科学省グローバルCOEプログラム「生存学」創成拠点を、人間科学研究所と先端総合学術研究科が共同申請して採択されたこともあり、大学院生や若手研究員の投稿が増えました。研究分野や方法論は多岐に渡り、執筆陣もベテラン・中堅の研究者と若手研究者のバランスがとれた活気ある誌面となっています。

一方でこうした多様性は、学術雑誌としての統一性や質をいかに確保するかという課題をもたらします。近年は研究倫理が厳しく問われるようになり、特に対人援助研究では、人を対象とした研究倫理について計画段階から考慮する必要があります。元編集委員長（2004～2010年度）の望月昭氏は、全学的な研究倫理審査体制の基盤構築に尽力されながら、学外者査読者の導入や、わかりやすい投稿・執筆マニュアルの作成など、本誌の学術的な質の向上に寄与されました。さらに前編集委員長（2011～2014年度）の松田亮三氏は、出版倫理の観点から査読・評価システムを整備して審査の公正性・透明性を高めるとともに、編集実務のオンライン化など編集作業の効率化もすすめられました。

これらの制度面での改良に加えて、編集委員のスムーズな連携、査読者の誠実かつ公正な審査、人間科学研究所事務局の手厚い支援があってこそ、ここに第33号を刊行できることを、新編集長として深く感謝しております。望月・松田両編集長からのバトンを引き継いで、本誌の発展に微力を尽くす所存です。

2016年4月には、立命館大学大阪いばらきキャンパスに総合心理学部が開設され、人間科学研究所も新たな転機を迎えます。関係者の皆様には、引き続き本誌へのご支援、ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

2016年1月
立命館大学人間科学研究所所長
『立命館人間科学研究』編集委員長
松原 洋子